［現代社会学部紀要　18巻１号, Ｐ105－116（2019）（研究ノート）］

授業力向上のための英語指導実践の省察
― 動機づけを高めるための英語指導ストラテジーを用いて* ―

林　田　朋　子**

Reflective Instruction for Developing Teaching Ability Using the Framework of Motivational Strategies in the Language Classroom

Tomoko HAYASHIDA**

はじめに

大学では必修科目として英語教育が行われているが、多くの場合教室以外で英語を使用する機会が少なく、英語習得に対する将来的な必要性を感じている学生は多くない。英語学習の目的は単位取得になりがちであり、英語がコミュニケーションの手段であるという認識が低いのが現状であろう（鈴木他、2010；阿川他、2010）。このような状況下において、いかにして学生の「やる気」を高める授業を行うかについて多くの教員が試行錯誤を重ねている。外国語教育研究における「動機づけ」理論は構造的に発展してきている一方、実際の教育現場で理論を踏まえた教育実践を行うことは容易なことではない。また、動機づけを高める英語指導の実践研究の多くは、プレゼンテーション活動などの特定の項目を動機づけの要因として研究しているものが多いが、実際の授業においては複数の動機づけ要因となる指導方法が用いられているのが一般的である。教師は日々の授業の中で学びながら、授業実践の省察と改善を繰り返し、より良い授業作りに取り組んでいる。動機づけ理論に立脚した体系的な手法を用いることで、より効果的な授業実践を行うことができるのではないだろうか。そこで本稿では、省察を中核とした授業実践力向上のための具体的なフォーマットを、動機づけ理論を基盤とした英語指導ストラテジーに求め、自らの授業サイクルに導入し、授業実践における省察から再デザインにいたるプロセスを記すことを目的とする。第１章では英語指導ストラテジーの理論的基盤である動機づけ理論の概要を述べる。第２章では、筆者が行った授業実践の概要を述べる。第３章では、動機づけの段階に応じたストラテジーリストを用いて、授業実践の省察を行う。第４章はまとめである。

１．動機づけ理論の概要

１．１　心理学分野における動機づけ理論

学習者の「やる気」（モチベーション）とは一般的には学習意欲のことを指すが、外国語教育研究においては、動機づけ理論として心理学分野での研究の影響を受けながら発展してきた。心理学分野における動機づけ理論は、動機づけの要因が何であるかを特定することで多岐に渡っている。例えば、結果に価値を認める期待価値理論（Brophy, 1999；Eccles and Wigfield, 1995）、人は自分の価値を高めるよう行動するように動機づけられているとする自己価値理論（Covington, 1998）、自分自身の意思で行動することでやる気が高められるとする自己決定理論（Deci and Ryan, 1985；Vallerand, 1997）などがある。しかし、人間がどのような行動をとるかに影響を及ぼしている動機は複雑であるにもかかわらず、心理学における各種の動機づけ理論はこれらの行動決定要因をある特定のものに絞ることで説明しようとしていた。これらの心理学分野における多様な動機づけ要因を言語教育に適用しようとした場合、要因のどれか一つを選び採用するだけでは、様々な学生が学び生活する教室内環境での事象を分析するには不十分であることが指摘され、外国語学習に影響を与える要因の全体像を捉える構成概念が必要とされるようになった。

１．２　第２言語（Ｌ２）分野における動機づけ研究

心理学分野での動機づけ研究を言語教育にそのまま適用させる限界が指摘される中、Ｌ２習得に関する動機づけ研究は心理学の分野とは異なる側面を捉えることで発展した。Gardner（1979；1985）は、学校教育における言語教育は、単なる言語知識の伝達にとどまることなく、目標言語の

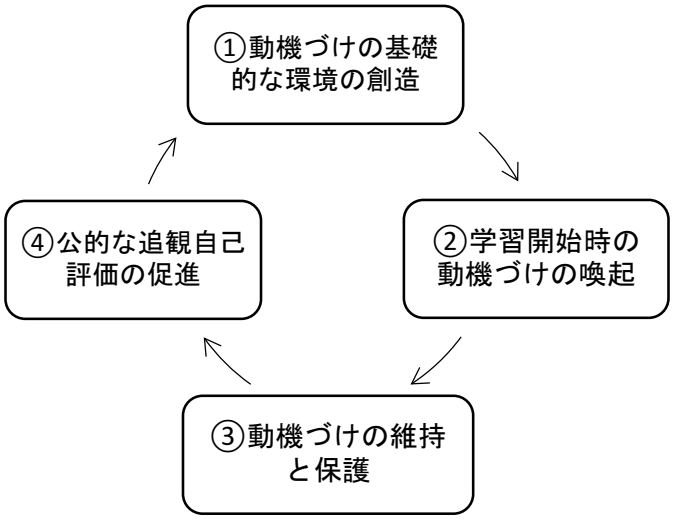
* Received October 10, 2019
** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科　Faculty of Contemporary Social Studies Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

社会との密接な関係性を保持していると主張した。このアプローチでは、Ｌ２社会に対する態度がＬ２学習に強い影響を与えるということを中心理念としており、Ｌ２文化に対する学習者の認識と学習行動の関係に焦点を当て、言語学習者の目標を統合的志向と道具的志向の２つに分類した。まず、統合的志向とは、Ｌ２学習者がＬ２の社会に対して肯定的な態度を有しており、その社会の構成員としての帰属願望が学習意欲に強く影響していると考えるものである。一方、道具的志向とは、Ｌ２学習の目的はＬ２社会との交流願望ではなく、就職に有利であるなどの実利的な理由で行われるというものである。このような社会心理学的な側面を重視した動機づけ理論においても、言語教育における動機づけの多様な側面を反映しきれていないという声が上がり、Ｌ２分野の動機づけ理論と教育心理学での理論を統合した新たなアプローチが提案された。その中でも最も代表的なものがDörnyeiによるＬ２動機づけ理論である。Dörnyeiは、Ｌ２教育における動機づけに心理学の要素を援用し、体系的な動機づけの枠組みを提供した後、言語習得における動機づけは静的なものではなく、段階的に変化しうる動的な要素であると位置づけ、「過程志向アプローチ」を提唱した(Dörnyei, 2000)。

１．３　過程志向アプローチ

「過程志向アプローチ」の動機づけを高める英語指導ストラテジー(Dörnyei, 2001)は、時間軸を基に下の図１が示すような包括的かつ循環的なシステムを基盤としている。まず、動機づけストラテジーを効果的に実行するための環境を整備し(図１-①)、学習行動の初期段階で動機づけを産出するために、目標設定や学習意思に大きな影響を与えると考えられるＬ２に対する態度や成功への期待などを刺激する（図１-②)。さらに、肯定的な学習体験や学習ニーズの重要性は、学習継続という行動に影響し、学習を阻害する要因を避けるといった行動抑制機能という役割を果たすため、②で生じた動機づけを維持する段階が必要とされる（図１-③)。最終段階では、生み出され維持された動機づけを、更に高める段階に到達する(図１-④)。これは、学習者が自己の学習過程の省察が、将来の学習意欲を決定する要因となると考えられているからである。このように、動機づけを高める指導実践システムは、①動機づけの基礎的な環境の創造、②学習開始時の動機づけの喚起、③動機づけの維持と保護、④公的な自己評価の促進の４段階になっており、Dörnyei（2001）は、それぞれの段階の下位項目として英語指導ストラテジーを列挙したリストを提示した（以下、英語指導ストラテジーリストと言う）(巻末資料)。例えば、図１-②に示された「学習開始時の動機づけを喚起するストラテジー」としては、「仲間のお手本を見せることで、言語に関連する価値観を高める。」「生徒が楽しみそうなＬ２学習の側面を強調し、実演してみせる。」「Ｌ２社会（インターネットなどを使って）自分で探索するように生徒に勧める。」などの具体的な授業実践のためのストラテジーがリストアップされている。

図１．動機づけを高める指導実践システム



出典：Dörnyei, (2001), (米山・関(訳), 2005, p. 32)を参考に筆者が作成

１．４　時間軸を有する英語指導ストラテジーを使用することの有用性

学習者の動機づけの要因が時間の経過を経て変化することは、多くの教師が日々の授業を通じて経験していることだろう。筆者が担当した英語の授業は全15回で構成されているが、第１回目の授業では英語学習に対して積極的・肯定的な態度であった学生が、中期以降に急速にやる気を無くし、欠席や小テストの点数の下落など、客観的にも動機づけの低下が顕著になったという例がある。一方、初期では英語への苦手意識が強く、学習のペースを掴めなかった学生が、中期以降は授業中も積極的に発言するようになるなど、後半にかけて動機づけが高まる学生の例も見られた。このように、学生の学習動機をただ一つの静的な要因と結びつけるのではなく、時間軸を伴う動的な要因と関連させて考えることが必要であることがわかる。したがって、動機づけの段階別に応じた英語指導ストラテジーリストを用いて教師が授業の省察を行うことは、学習者の動機づけの実態に即しており、効果的な授業実践を行うために有用であると考えられる。次節では、英語指導ストラテジーリストを用いて授業実践の省察を行う。

２．授業の概要

まず、省察の対象となる授業の概要を述べる。筆者が行った英語の授業は、英語でのコミュニケーション能力の向上を目的とするクラスである。学生は国立大学の理工系学部に所属する２年生36名であり、男子27名、女子９名の構成であった。授業回数は全15回であり、授業時間は90分である。本授業では、能動的な学習方法を学び、英語の運用能力を向上させることを目的とし、様々な題材について多様な角度から意見を述べるため、ロールプレイやディスカッションを行った。また、メンバーと協働し説得力のあるプレゼンテーションを行う活動を通して、英語での発信力を鍛えることを目指した。授業目標は、自分の意見を様々な英語表現を用いて伝えることができる、グループ活動により互いの意見を尊重しながら協働活動を行うことができる、英語による情報収集とその整理方法を理解し実践することができる、的確な構造と表現を用いた英語によるプレゼンテーションを行うことができる、の４点である。授業の前半60分はスピーキングをメインとした授業を行い、後半30分はプレゼンテーションを行うためのグループ活動を行った。前半の授業で使用したテキストは『Two Sides to Every Discussion』（成美堂）である。このテキストの特徴は、食文化や教育など身近な話題を用いて、自分の意見を論理的かつ説得力をもって伝えることができるよう構成されている点にある。15回の授業の中でできるだけ多くの分野を網羅するように筆者がテーマを選んだ。例えば第２回目の授業のテーマは、「Bread or Rice」（朝ごはんはご飯よりもパンである）である。学生は自分の意見を伝えるための語彙や表現を学びながら、単にご飯派かパン派のどちらかを選ぶだけでなく、その理由を３つ述べて論理的に伝えなくてはならない。筆者はこれまで英語を教えてきた経験から、日本人の学生の弱点は語彙力や文法能力に限られず、自分の意見を述べる際のアイデアの創出力や論理的構成力にあると感じていた。そこで、身近なテーマに関して論理的に意見を述べることに慣れ親しむための活動を授業の前半60分を使用して行うことにした。60分の授業構成は以下のとおりである。

①ウォームアップ：テーマに関する簡単な質問について時間を決めてペアで話合う。
②ボキャブラリー：テキストの内容に出てくる単語の確認。
③リーディング：テーマに関する２つの意見についての英文をペアで音読する。
④ショートライティング：自分の意見を決めて、その理由を考え、簡単な英作文をする。
⑤スピーキング：自分の意見をペアに伝える。

後半30分はプレゼンテーションの準備のためのグループ活動を行った。６～７名の小グループを学生が自主的に作り、プレゼンテーションのテーマは自由とした。プレゼンテーションの基本的な構成と、評価基準、時間制限などを説明し、プレゼンテーションに役立つフレーズなどはプリントを配布して補足した。プレゼンテーションの発表の機会は学期中に２回設け、１回目の経験を２回目に活かすことができるようにした。授業の最終回（15回目）に、授業の感想や要望などを自由記述式で記入するアンケートを実施した。アンケート結果は授業実践の省察の参考とした。次章では、本授業を英語指導ストラテジーリスト（巻末資料）に基づき省察するとともに、授業改善のために今後実践を試みたい指導ストラテジーについて述べる。

３．動機づけを高めるための英語指導ストラテジーリストを用いた省察

３．１　動機づけの基礎的な環境の創造に関する英語指導ストラテジー

授業実践の省察のプロセスは次の通りである。⑴リストの中で、指導に取り入れたものを確認する。⑵取り入れた指導方法の更なる強化について考える。⑶今後授業実践で効果があると思われるストラテジーについての具体的な手法を考案する。授業実践の省察に際しては、自己観察と授業終了後に行った自由記述式アンケートの結果を用いた。まず、①動機づけの基礎的な環境の創造、から見てみよう。この段階においては、動機づけストラテジーがうまく機能するためには前提条件となる環境を準備する必要がある（巻末資料）。まずリストの中で、筆者が実際に授業実践で指導に取り入れたものを確認し具体的に検討する。その後、現在取り入れている指導方法の強化について考える。授業で取り入れたものは以下の６項目である。

- Ｌ２に対する自分の個人的な興味を生徒と共有する。(1-1)
- 満足感を生み出し、生活を充実させる意味のある経験として、自分がＬ２学習を大切にしていることを生徒に示す。(1-2)
- 生徒の一人ひとりを気にかけ、また彼らの話に耳を傾ける。(3-2)
- 最初の授業に緊張を解きほぐす活動を用いる。(6-2)
- 定期的に小集団活動を実施して、生徒たちがうまくとけ込めるようにする。(6-3)
- 決まった座席に固定しないようにする。(6-5)

・Ｌ２に対する自分の個人的な興味を生徒と共有する（1-1）

本授業の目標は「英語で論理的に意見を述べる力をつける」ことであった。この目標を設定した理由として、英語を学ぶという行為が、文法や単語をならべ正しい文章を作ることだけではなく、共通した思考の枠組みを用いてメッセージを伝達することがコミュニケーションにおいて非常に重要であることを伝えた。具体例として実際に筆者自身が留学した際に、英語での情報伝達で誤解を招き大変苦労した話をした。実際に留学した際の写真や動画があれば、より臨場感と説得力を増加させることができるものと思われる。

・満足感を生み出し、生活を充実させる意味のある経験として、自分がＬ２学習を大切にしていることを生徒に示す。(1-2)

筆者自身が英語を勉強する過程を通して、日本語だけでは得られることができない情報があることや、英語を通して様々な人と交流できる点を強調した。例えば、新しい技術に関する情報なども英語を介したほうが速く手にいれることができる点などを伝えた。学生の興味をより引き出す方法として、学生が実際に学んでいる分野の情報について、オーセンティックな素材を提供することが考えられる。

・生徒の一人ひとりを気にかけ、また彼らの話に耳を傾ける。(3-2)

授業ではグループワークの時間をとり、机間巡回を行った。巡回中気になる学生には声をかけ、個人的に話を聞くように心がけた。この際、名前をできるだけ覚えるようにした。授業時間前後の時間を使い、非公式的な雰囲気の中でコミュニケーションをとることができればより深く学生を知る機会となる。

・最初の授業に緊張を解きほぐす活動を用いる。(6-2)

授業の前半は必ずペア活動を行うようにした。質問は身近な話題を用いるようにし、専門的な知識や情報を必要としないものを選ぶようにした。時間制限のある会話活動が主であったが、ゲーム性のある活動で英語に対する抵抗をより和らげることができる。

・定期的に小集団活動を実施して、生徒たちがうまくとけ込めるようにする。(6-3)

授業の後半30分は毎回グループでプレゼンテーションの準備を行うことに使用した。グループは生徒が自主的に作った。学生が自らグループを作ったため、男女が別々のグループになってしまった。自由記述のアンケートには、男女混合の方がやる気がでるとの意見もあったため、くじなどのランダムな方法でグループを作る方法も考えられる。

・決まった座席に固定しないようにする。(6-5)

いつも同じ座席にならないようにペア活動のペア作りを工夫した。例えば、全員が立って誕生日が偶数月と奇数月に分かれてもらい、向かい合ってペアになるなど、英語を使ったアクティビティを介してペアを作る活動などを取り入れた。ペア作りに新鮮味がなくなると、学生が最初に座った

座席から動きたがらないという状況があったため、音楽をかけるなどの方策も考えられる。

ここまで、動機づけが機能するための前提条件となる環境の創出について、英語ストラテジーリストをもとに実際に指導に取り入れた６項目を確認した。自由記述式アンケート結果にある「グループワークの中で協力することができた」「ペアを作る際平等にいろいろな人とくめた」「皆で話す活動が楽しかった」「グループ学習が多くて楽しかった」という記述にも見られたように、ペアやグループ活動において様々なクラスメートと交流することは学習動機に良い影響を与えていたようである。また、教師が机間巡回の際に学生に個別に話しかける点についても、「先生が全体のことをよく見ていてくれた」という感情を喚起し、好意的に捉えられていたようである。取り入れた項目についても、さらに強化するための改善点が見受けられた。次に、指導に取り入れなかった項目の中で今後取り入れるべきストラテジーは、以下の２項目である。

- 教師が指定する規範の重要性と、その規範によって学習が向上することを説明し、生徒の同意を求める。(7-2)
- どんな規範違反でもうやむやに済ますことはしない。(8-2)

- **教師が指定する規範の重要性と、その規範によって学習が向上することを説明し、生徒の同意を求める。(7-2)**

遅刻に関するルールを徹底するために、遅刻者は名簿に印をつけるようにしていた。また、英語での会話の時間に日本語を使用してしまう学生については、机間巡回の際に直接声をかけ、英語で話すように促した。しかし、遅刻や会話中の日本語使用に対する明確なルールを設定しなかったため、これらの行為を減少させることができなかった。遅刻に対する規範の徹底と、時間を厳守して出席することがクラス全体や本人の学習進捗に重要であることを、クラス全体で共有しておくことが必要である。また、アンケート結果には、「単位取得が困難」「評価の仕方をもっと具体的に授業のはじめで教えてほしかった」「最終評価の方法についてもう少し早く言ってほしかった」「成績評価をもう少しやさしくしてほしいと思った」「授業の評価基準が他のクラスと比べて厳しすぎ」など、評価基準に関する記述が多く見られた。アンケート結果から目標基準となる成績評価基準に関する情報がしっかりと共有されていなかった点が問題であったことがわかる。成績評価基準は重要な「集団の決まり」の一つである。特にプレゼンテーション評価基準や成績評価における出欠の扱いなどは重要な要素であるが、これらの規範による学習の向上や、納得のいく説明が欠如していた。評価基準に関しては、授業回の最初だけではなく、複数回にわたり周知しておくことで、目標の明確化を図ることができ、学習動機の持続化に繋がるものと考える。ここまで、動機づけが機能するための環境創出の段階での授業の省察を行った。次節では、②学習開始時での動機づけの喚起、について省察する。

３．２　学習開始時における動機づけの喚起

教師の理想から言えば「英語好き」であり、明確な将来像を持った「熱心な」生徒を対象に授業を行うことであるが、実際には社会的な要請に基づいて義務的に「勉強させられている」状態にある学習者が生徒であると考えることが現実的であろう。この点についてBrophy（1998）は、まずは学習者に設定された目標を受け入れるよう励ます手立てをみつけることが重要であると述べている。つまり、②学習開始時での動機づけの喚起とは、学習者が学習する言語に対して肯定的な価値観を抱き、自律的に学習に向かう態度を養成することである。まず、学習者が対象言語を学ぶこと自体について肯定的な内在的価値観を養う方法として、学習者が尊敬するロールモデルに接する機会を提供することや、生徒の喜びと関心を引き出すことで魅力的な授業を演出することをあげている。また、統合的な価値観を涵養するため、その言語が使用されている社会や文化を体感できる雑誌や音楽、映画などを持ち込むなど、現実をとおしてＬ２を学ぶ機会を提供することも提案している。また、道具的価値観としては、Ｌ２学習によって将来の仕事や学業でもたらされる現実的な恩恵について話すことなどが提案されている。②学習開始時での動機づけを喚起するストラテジーリスト（巻末資料）に基づき、本授業の省察を行う。リストの中で筆者が授業で取り入れた項目は以下の３項目である。

- 世界におけるＬ２の役割を絶えず指摘し、生徒自身にとってもまた彼らの社会にとっても、それがきっと役に立つことを強調する。(12-2)

- 生徒が課題の成功には何が必要とされるか正確に知るようにする。(13-2)
- 指導内容を生徒の日常体験と背景に関連づける。(15-2)

- 世界におけるＬ２の役割を絶えず指摘し、生徒自身にとってもまた彼らの社会にとっても、それがきっと役に立つことを強調する。(12-2)

外国人労働者や世界各国からの観光客の増加など、英語やその他の外国語でのコミュニケーションが必要とされる場面が増えてきていることを話した。改善点としては、関連するニュース画像を視聴するなど、より視覚的に英語学習の必要性を実感することができる方法を取り入れることなどが考えられる。

- 生徒が課題の成功には何が必要とされるか正確に知るようにする。(13-2)

本授業では２回のプレゼンテーションが課題となっていた。プレゼンテーション作成にあたっては、評価基準を配布し、課題の評価基準を説明した。それぞれの評価基準について具体例をあげて説明することで、より目標が明確になったものと思われる。

- 指導内容を生徒の日常体験と背景に関連づける。(15-2)

意見を理論的かつ簡潔にまとめて述べる方法は、日本語や英語に限らず必要になる知識であり、大学では学会発表などで役立つことになる点を指摘した。この点に関しては、自由記述式アンケートの中に「学会の発表で英語を使う機会がある」との回答があったことからも重要な点であることがわかる。

次に、授業改善のため、今後取り入れる必要があると考えられる下記の５項目について考える。

- 年長の生徒をクラスに招いて、彼らの肯定的な体験を話してもらう。(9-1)
- Ｌ２社会（インターネットなどを使って）自分で探索するように生徒に勧める。(11-3)
- 生徒が十分な準備と支援を必ず得られるようにする。(13-1)
- ニーズ分析の手法を用いて、担当する生徒のニーズ、目標、そして関心について理解し、次にこの知見をできるだけ多くの自分の指導計画の中に取り入れる。(15-1)
- 学習者が持っているかもしれない誤った信念、期待感、想定に明確に対応する。(16-1)

- 年長の生徒をクラスに招いて、彼らの肯定的な体験を話してもらう。(9-1)

前年度の学生のプレゼンテーション発表のビデオをサンプルとしてみてもらうことで、より具体的なイメージをもつことができる。

- Ｌ２社会（インターネットなどを使って）自分で探索するように生徒に勧める。(11-3)

学生のプレゼンテーションのテーマは自由としたために、身近な話題や国内の話題に集中することになり、Ｌ２社会との接点をつくることができなかった。次回は、テーマにＬ２社会と比較するなどの活動要素を取り入れ、学生自らがＬ２社会に関する情報を収集する機会を設けるようにする。

- 生徒が十分な準備と支援を必ず得られるようにする。(13-1)

前半にスピーキング活動、後半にプレゼンテーション活動を、活動内容が多かったため、一つ一つの活動時間を十分確保することができなかった。ディクテーションなどの活動にはもう少し時間を割いてほしい、とのコメントがアンケート結果にもあったことから、特に「書く」ことに関連する活動を行う際には、学生が安心して取り組むことができる時間を確保することが必要である。

- ニーズ分析の手法を用いて、担当する生徒のニーズ、目標、そして関心について理解し、次にこの知見をできるだけ多くの自分の指導計画の中に取り入れる。(15-1)

授業の第１回目でニーズ分析のアンケートを行うべきであった。特に、授業で導入しようと考えている英語指導ストラテジーに関連する項目を、質問用紙を通じて事前に把握しておき、ストラテジーと学生のニーズとの適合性を確認することが重要である。

- 学習者が持っているかもしれない誤った信念、期待感、想定に明確に対応する。(16-1)

学生との非公式な会話の中で、英語を苦手であると考えている学生の中には、「英語を習得する才能がない」と考えている者や、「幼少期に英語を学習していないので、英語を流暢に話せるようになることはほぼ不可能である。」と考えている学生がいた。これらの誤解を解くためには、英語習得に関する知識を伝達する必要がある。

３．３　動機づけを維持し保護するための英語指導ストラテジー

最初は動機づけが高く授業にも熱心であった学生が、授業学期の途中から学習意欲を喪失し、小テストの結果や出席状況などにも好ましくない事態に陥った例は少なくない。動機づけの「過程志向アプローチ」によれば、まず動機づけがうまく機能するための環境づくりを行い、学習者のＬ２やＬ２学習に対する肯定的な価値観を高めるなどすることで、学習者の学習行動を動機づけることができるとした。しかし、このような状況は努力して持続させることが必要である。この動機付けを維持し保護するための段階でのストラテジーは、学習を興味を引く楽しいものにする、動機づけを高めるようにタスクを提示する、具体的な学習目標を設定する、学習者の自尊感情を守り自信を強める、学習者に肯定的な社会的心象を持たせる、学習者間の協力を促進する、学習者自律性を培う、学習者が自ら動機づけを高めるストラテジーを促進する、学習者の自己動機付け能力を強化する、という８つの領域に分類されている（巻末資料）。動機づけを保護し維持するための英語指導ストラテジーリストの中で、筆者が授業で実践したものは以下の５項目である。

- タスクの内容を生徒の自然な興味に合わせる。もしくは目新しく、興味深く、エキゾチックで、ユーモラスで、競争的で、空想的な要素を取り入れることにより、より魅力的なものにする。(18-2)
- 目に見える完成品を作り出すタスクを選択する。(18-3)
- 個々の参加者の知的および（または）身体的な関与を要求するタスクを選択する。(19-1)
- タスクを遂行するための適切なストラテジーを提供する。(20-3)
- 学習者のチームが、同じ目標に向かって一緒に作業することが求められるようなタスクを設定する。(28-1)

- タスクの内容を生徒の自然な興味に合わせる。もしくは目新しく、興味深く、エキゾチックで、ユーモラスで、競争的で、空想的な要素を取り入れることにより、より魅力的なものにする。(18-2)

自由記述式アンケートには、「テーマがおもしろかった」という回答があった。多くの学生の興味に合わせられるよう、様々な分野からテーマを選択した点、またプレゼンテーションのテーマを学生が自由に選べる点などが効果的であったと思われる。

- 目に見える完成品を作り出すタスクを選択する。(18-3)

プレゼンテーションの作成は、完成品とその発表を含んでおり、視覚的にも達成の到達地点がわかりやすいタスクであった。プレゼンテーションの動画をクラスの全員が共有できる状態にすることで、作品を作り出す喜びをより引き出すことができたものと考える。

- 個々の参加者の知的および（または）身体的な関与を要求するタスクを選択する。(19-1)

プレゼンテーションの発表では、一人少なくとも１分は話すことが要件となっていたため、全員が積極的に参加する要素を含んでいた。アンケート記述にも、「全員が話す機会があったのが良かった。」とあった点からも、参加者の関与が要求されるタスクは学習者の学習意欲を高める効果があるものと考えられる。一方、プレゼンテーション作成の過程における仕事分担などは学生の自主性に任されていたため、全員の参加の度合いを把握することができなかった。この点については、仕事分担や進捗状況を報告するシステムを取り入れる方法が考えられる。

- タスクを遂行するための適切なストラテジーを提供する。(20-3)

２つの見解のどちらかを選択し、自分の意見を述べる活動では、短く簡単に意見をまとめる方法を提示した。例えば、文は名詞句に変えることでより簡潔に意見を述べることができる点や、パラフレーズを行うことで表現の単調さを回避する方法などを伝えた。また、プレゼンテーションでは、事前に評価票を配布しておくことで、プレゼンテーションに必要なストラテジーを同時に学ぶ機会を提供した。

- 学習者のチームが、同じ目標に向かって一緒に作業することが求められるようなタスクを設定する。(28-1)

課題はプレゼンテーション作成と発表であり、少なくとも一人１分の発言時間が要件であったため、全員が参加する動機となった。授業観察からも、うまく役割分担をして作業することができていたようだった。

今後授業改善のために必要と考えられる③動機づけを維持し保護するための英語指導ストラテジーは以下の３項目である。

- 学習タスクやその他の指導にできる限り変化を持たせる。(17-1)
- 生徒の進歩をモニターし、契約の詳細が間違いなく双方から観察されるようにする。(22-2)
- 学習過程のできる限り多くの側面について、学習者が真の選択をすることを許容する。(29-1)

- 学習タスクやその他の指導にできる限り変化を持たせる。(17-1)

アンケートに「授業に意外性がなかった」という記述が見られた。テキストを使用したため、「ボキャブラリー」→「リーディング」→「スピーキング」という流れで授業を標準化した点が、「飽き」を生じさせていたものと考えられる。例えば、新出単語の導入はゲーム形式にするなど、同じ目的の活動に変化を持たせる必要がある。

- 生徒の進歩をモニターし、契約の詳細が間違いなく双方から観察されるようにする。(22-2)

プレゼンテーションの評価は、発表後に全体で確認したが。総合成績がどのようになっているのかを学生と教師の双方が随時モニターできるシステムが必要であった。この点に関してアンケート記述には「成績評価についての明確化」を求めるものが見られた。

- 学習過程のできる限り多くの側面について、学習者が真の選択をすることを許容する。(29-1)

スピーキング活動にはテキストを使用したため、学生にテーマを選択する機会が無かった。代替案としては、テキストにある数あるテーマの中から、学生が選択する機会をあたえることが考えられる。

３．４　肯定的な自己評価を促進するための英語指導ストラテジー

学習の初期段階で喚起された動機は、授業の魅力を高め、学習者の自律性を育むことなどを経て維持・保護される。このようにして動機づけられた学習者は、その学習成果について自己評価を行い、未来の学習行動に関して肯定的なサイクルを生み出すことが望まれる。教師はこのような自己評価を促進するための役割を担っていると言えるだろう。「過程志向プロセス」モデルの最後の英語指導ストラテジーは、学習経験を締めくくる自己評価を促進するためのものである。筆者が使用した④肯定的な自己評価を促進するための英語指導ストラテジーは以下の１項目である。

- 学習者の積極的な発言に気づいて、それを取り上げる。(32-1)

- 学習者の積極的な発言に気づいて、それを取り上げる。(32-1)

ペアやグループ活動の際には机間巡回を行い、学生の発言の中で気が付いたものを取り上げ、コメントを行った。板書を行うなどして、クラス全体で視覚的に発言を振り返る時間を設けることで、より記憶に残るフィードバックにすることができる。

今後の授業改善として指導に取り入れるべきと考える項目は以下の３点である。

- 視覚的記録の作成を奨励し、様々な催しを定期的に行うことで学習者の進歩を目に見えるものにする。(33-2)
- 評点も単に客観的な成績のレベルにとどまらず、努力と進歩も確実に反映するようにする。(35-2)
- 様々な自己評価法を提供することで、正確な生徒自己評価を推し進める。(35-4)

- 視覚的記録の作成を奨励し、様々な催しを定期的に行うことで学習者の進歩を目に見えるものにする。(33-2)

毎回の授業記録を残すために、振り返りシートを作成することで、学生は自己の学習進捗状況の振り返りと、成績評価基準を毎回目にすることができ、ルールの共有化の徹底に繋がるものと考える。

- 評点も単に客観的な成績のレベルにとどまらず、努力と進歩も確実に反映するようにする。(35-2)

プレゼンテーションは動画録画をし、１回目と２回目の進歩について教師が気づいた点を伝えた。実際に学生が自分たちのプレゼンテーション動画を見て、進歩している点がわかる機会を設け、学生がプレゼンテーション動画を共有できる仕組みを作ることが必要である。

- 様々な自己評価法を提供することで、正確な生徒自己評価を推し進める。(35-4)

毎回の授業で学生が自己の活動を振り返ることができる振り返りシートを作成し、自己評価につなげる活動を行う方法が考えられる。

４．まとめ

本稿では、動機づけを高める英語指導ストラテジーリストを使用して、授業実践の省察を行い、授業の再デザインに活用するプロセスについて実例を通じて述べた。省察の結果、「①動機づけの基礎的な環境の創造」で使用したストラテジーが６項目であるのに対し、「②学習開始時における動機づけの喚起」は３項目、「③動機づけを維持し保護する」ためのストラテジーは５項目、「④肯定的な自己評価を促進する」ためのストラテジーの使用は１項目であった。使用したストラテジー数が多ければより良い授業になるとは限らない。しかし、動機づけのプロセスの中で、自己が用いた指導ストラテジーを客観視することで、「②学習開始時における動機づけの喚起」や「④肯定的な自己評価を促進する」ストラテジーが不足していることに気が付いた。すなわち、学生自身が英語や英語圏の文化や社会に対する肯定的価値観を高め、自己の将来と結び付けて学習動機を高めるための指導要素や学生が自己評価を行いそれに基づいて未来の学習を促進するような指導要素が足りなかったのではないかという省察に至った。たとえ動機づけの環境づくりができていたとしても、肝心の学生に学習の動機が芽生えなければ、効果的な指導を実現することはできないだろう。「過程志向アプローチ」を基に授業を省察することで、動機づけを高めるために行っていると考えていた指導方法が、実際には動機づけの環境づくりの段階に終始していた可能性があるなど、動機づけの循環プロセスの中での指導方法の位置づけを確認する機会となった。また、アンケート結果や授業の自己観察を通して、今後使用する必要があると考えられる指導ストラテジーや、授業で用いたストラテジーの改善点が明らかになった。特に、集団としての規範やそれを集団で共有する機会を設けることの重要性については、動機づけとの関連性の中で実践に結び付けていく必要があると考える。

多種多様な学生が一つの教室に集まり外国語を学ぶＬ２教室環境において、特効薬のようにどの学生にも効果的に働く唯一の指導方法というものが存在しないことは、多くの教師が経験済みであろう。したがって、自己の指導方法の細かな差異の積み重ねが結果的に動機づけに大きく影響することもある。ベテラン教師は経験の積み重ねから指導方法を調整しつつ授業を行うことで動機づけを高める授業を実現していると考えられるが、体系化されたストラテジーリストを用いることにより、更に効果的な授業改善サイクルを創出することができるものと考える。このような視座に立てば、本稿は、授業実践の省察の一事例として意義あるものであると考える。今後は、英語指導ストラテジーリストを用いた省察に加え、学習者の段階的動機づけの変化に関して、質問用紙を用いて量的に検証することが必要であろう。また、ストラテジーリストを基盤として、授業実践力向上のための具体的な指導方法を教員同士が共有する場を設けることが、教員の長期的な成長に必要であると考える。

（巻末資料）英語指導ストラテジーリスト

①動機づけの基礎的な環境を作り出すストラテジー
1. 扱う教材に対する自分の熱意と、それが自分に個人的にどんな影響を及ぼしているかについて実例を挙げて説明し解説する。
1-1. Ｌ２に対する自分の個人的な興味を生徒と共有する。
1-2. 満足感を生み出し、生活を充実させる意味のある経験として、自分がＬ２学習を大切にしていることを生徒に示す。
2. 生徒の学習を真剣に受け止める。
2-1. 生徒に教師が彼らの進歩を気にかけていることを示す。
2-2. 学習のどんなことについても、いつでも快く相談に乗ることを伝える。
2-3. 生徒が達成できることに関し、十分高い期待値を持つ。
3. 生徒と個人的な関係を築く
3-1. 教師が生徒たちを受容し、また気にかけていることをはっきり示す。
3-2. 生徒の一人ひとりを気にかけ、また彼らの話に耳を傾ける。
3-3. 気軽に、どこでも教師と常に接触できることを伝える。
4. 生徒の親たちと協力関係を築く。
4-1. 親に子供の進歩について定期的に知らせる。
4-2. 家庭での一定の支援的な作業を行うことに親の助けを求める。
5. 教室に楽しく、支持的な雰囲気を作る。
5-1. 許容基準をしっかり決める。

5-2. 間違いを恐れずにやることを勧め、間違いは学習の自然な一部であると思わせる。
5-3. ユーモアを取り入れ、また勧める。
5-4. 生徒の好みに応じて、教室環境を生徒の考えるように整備することを勧める。
6. 集団の結束強化を促進する。
6-1. 相互交流、協力、そして生徒間の本物の個人的情報の共有を促進する。
6-2. 最初の授業に緊張を解きほぐす活動を用いる。
6-3. 定期的に小集団活動を実施して、生徒たちがうまくとけ込めるようにする。
6-4. 課外活動や遠足を勧めたり、できれば計画する。
6-5. 決まった座席に固定しないようにする。
6-6. 全体で取り組む課題を成功させたり、小集団対抗の競技を伴う活動を組み入れる。
6-7. 集団ロゴの制定を勧める。
7. はっきりとした形で集団規範を作成して、生徒たちと話し合い、彼らに認めてもらう。
7-1. 集団結成の始めに規範をはっきりと作るために、具体的な「集団の決まり」を考える活動を組み入れる。
7-2. 教師が指定する規範の重要性と、その規範によって学習が向上することを説明し、生徒の同意を求める。
7-3. 生徒たちから更なる決まりを引き出し、教師が提案した決まりと同様に話し合う。
8. 集団規範をしっかりと守らせるようにする。
8-1. 教師が必ず、決められた規範に自らしっかりと従うようにする。
8-2. どんな規範違反でもうやむやに済ますことはしない。

②学習開始時の動機づけを喚起するストラテジー
9. 仲間のお手本を見せることで、言語に関連する価値観を高める。
9-1. 年長の生徒をクラスに招いて、彼らの肯定的な体験を話してもらう。
9-2. 生徒たちに彼らの仲間の考えを学級通信などで知らせる。
9-3. 担当する生徒たちを、教科に熱心に取り組んでいる（集団活動やプロジェクト）の仲間に加える。
10. Ｌ２学習過程に対する学習者の内在的な関心を高める。
10-1. 生徒が楽しみそうなＬ２学習の側面を強調し、実演してみせる。
10-2. Ｌ２との最初の出会いを肯定的な経験にする。
11. Ｌ２とその使用者、また外国らしさ全般に対する肯定的で開放的な気質を育てることで、「統合的」価値観を高める。
11-1. 外国語シラバスに社会文化的要素を組み入れる。
11-2. 影響力の強い著名人の言語学習についての肯定的な見解を引用する。
11-3. Ｌ２社会（インターネットなどを使って）自分で探索するように生徒に勧める。
11-4. Ｌ２使用者とＬ２文化財との触れ合いを多くする。
12. Ｌ２知識と結びついた道具的価値観に対する生徒の理解を高める。
12-1. 生徒たちに、Ｌ２をしっかり身に付けることが彼らの重視している目標の達成に役立つことを常に意識させる。
12-2. 世界におけるＬ２の役割を絶えず指摘し、生徒自身にとってもまた彼らの社会にとっても、それがきっと役にたつことを強調する。
12-3. 生徒たちに実生活の場面でＬ２の知識を使ってみるように勧める。
13. 特定の課題および学習全般に関する生徒の成功期待感を高める。
13-1. 生徒が十分な準備と支援を必ず得られるようにする。
13-2. 生徒が課題の成功には何が必要とされるか正確に知るようにする。
13-3. 成功を阻む重大な障害が存在しないようにする。
14. 生徒の目標志向性を、彼らが認める教室目標を明確に定めることで高める。
14-1. 生徒たちに個人的な様々な目標を話し合わせ、共通する目標の概要を議論させて、最終的な結論を公に示す。
14-2. 時々、教室目標とそれを達成するために特定の活動がどのように役立つかに注意を引く。
14-3. 教室目標を、必要ならば再調整することで、達成可能な状態にしておく。
15. 教育課程と教材を、学習者に関連の深いものにする。
15-1. ニーズ分析の手法を用いて、担当する生徒のニーズ、目標、そして関心について理解し、次にこの知見をできるだけ多くの自分の指導計画の中に取り入れる。
15-2. 指導内容を生徒の日常体験と背景に関連づける。
15-3. 授業の計画と運営に生徒の協力を得る。
16. 現実的な学習者信念を作る手助けをする。
16-1. 学習者が持っているかもしれない誤った信念、期待感、想定に明確に対応する。
16-2. 言語を学ぶ様々な方法と成功に寄与する多くの要因に関する、学習者の一般的な理解を深める。

③動機づけを維持し保護するストラテジー
17. 教室内での活動の単調さを打破することによって、学習をより興味深く楽しいものにする。
17-1. 学習タスクやその他の指導にできる限り変化を持たせる。

17-2. 学業内で、情報の流れだけでなく動機づけを高める流れに焦点を当てる。
17-3. 時には生徒が予期しないことをしてみる。
18. タスクの魅力を増すことにより、学習を学習者にとって興味深く楽しいものにする。
18-1. タスクを挑戦的なものにする。
18-2. タスクの内容を生徒の自然な興味に合わせ、もしくは目新しく、興味深く、エキゾチックで、ユーモラスで、競争的で、空想的な要素を取り入れることにより、より魅力的なものにする。
18-3. 目に見える完成品を作り出すタスクを選択する。
19. 学習者をタスクへの積極的な参加者となるようにもとめることにより、学習を興味深く楽しいものにする。
19-1. 個々の参加者の知的および（または）身体的な関与を要求するタスクを選択する。
19-2. すべての生徒のための具体的な役割と個別の課題を作り出す。
20. 動機づけを高める方法でタスクを提示し、実施する。
20-1. タスクの目的と有用性を説明する。
20-2. タスクの内容についての生徒の興味を引き出す。
20-3. タスクを遂行するための適切なストラテジーを提供する。
21. 教室で目標設定の手法を用いる。
21-1. 学習者が自分で具体的で短期の目標を選択することを奨励する。
21-2. 目標達成の締め切りを重視し、継続的にフィードバックを与える。
22. 生徒の目標に向けた情熱を形式化するために、生徒との契約手法を用いる。
22-1. 生徒が学ぶ内容と方法、そして教師が生徒を助け報酬を与える方法を具体的に示した詳細な契約書を、個々の生徒もしくは集団全体と共に作成する。
22-2. 生徒の進歩をモニターし、契約の詳細が間違いなく双方から観察されるようにする。
23. 学習者に定期的な成功経験を与える。
23-1. 言語教室で、多様な成功の機会を与える。
23-2. 課題の難易度を生徒の能力に合わせ、要求の厳しい活動と処理しやすい課題のつり合いをとる。
23-3. 学習者ができないことではなく、できることに焦点を当てたテストを作成する。そして、改善のための方法も盛り込む。
24. 定期的に励ましを与えることにより、学習者の自信を育む。
24-1. 学習者の注意を、彼らの長所と能力に向けさせる。
24-2. 教師が、生徒の学ぶ努力や課題を完結する能力を信じていることを、生徒に知らせる。

25. 学習環境において不安を誘発する要素を除き、あるいは緩和することによって、言語不安を軽減することを支援する。
25-1. 目立たない方法であっても社会的比較は避ける。
25-2. 競争ではなく協調を促進する。
25-3. 学習過程の一部として間違いをするという事実を、学習者が受容するのを支援する。
25-4. テストや評価を完全に「透明」なものにし、生徒との交渉も最終的な評価に加える。
26. 学習者に多様な学習ストラテジーを教えることにより、自己の学習能力に対する自信を構築する。
26-1. 新教材の摂取（intake）を促進する学習ストラテジーを生徒に教える。
26-2. コミュニケーション上の困難を克服するのを手助けする、コミュニケーション・ストラテジーを生徒に教える。
27. 学習者が学習課題に取り組んでいる時に、肯定的な社会的心象を保持することを可能にする。
27-1. 参加者に「優れた」役割が与えられる活動を選択する。
27-2. 学習者に恥をかかせる批判や、いきなり脚光をあびせるような、面子を脅かす行為を避ける。
28. 学習者間の協力を促進することにより、生徒の動機づけを高める。
28-1. 学習者のチームが、同じ目標に向かって一緒に作業することが求められるようなタスクを設定する。
28-2. 評価の際に、個人の結果だけでなくチームの結果を勘案する。
28-3. チームでいかにうまく作業するかを学ぶために、何らかの社会的訓練を生徒に与える。
29. 学習者の自律性を積極的に促進することにより、生徒の動機づけを強化する。
29-1. 学習過程のできる限り多くの側面について、学習者が真の選択をすることを許容する。
29-2. 様々な統率や指導の役割と機能を、できる限り多く学習者に譲渡する。
29-3. 支援者の役割を取り入れる。
30. 学習者の自己動機づけ能力を強化する。
30-1. 学習者の自己動機づけの重要性に対する意識を高める。
30-2. 以前に有効だと考えたストラテジーを互いに共有する。
30-3. 学習者に自己動機ストラテジーを取り入れ、作り出し、適用することを奨励する。

④肯定的な自己評価を促進するストラテジー
31. 学習者の中に努力帰属を高める。
31-1. 能力不足ではなく、努力と適切な学習方法の不足によって自分の失敗を説明するように学習者に勧める。

31-2. 能力帰属の受け入れを拒み、教育課程は学習者の能力の範囲内にあることを強調する。
32. 肯定的情報フィードバックを学習者に与える。
32-1. 学習者の積極的な発言に気づいて、それを取り上げる。
33. 学習者の満足感を高める。
33-1. 学習者の成績と進歩を観察して、どんな成功でも時間を取って祝う。
33-2. 視覚的記録の作成を奨励し、様々な催しを定期的に行うことで学習者の進歩を目に見えるものにする。
33-3. 学習者の技術獲得の展示を行うための課題を定期的に組み入れる
34. 動機づけを高めるように報酬を与える。
34-1. 生徒が報酬にあまり夢中にならないようにする。
34-2. 品物によらない報酬でも何か後まで目に見える形を持つものであるようにする。
35. 動機づけを高める方法で評価を用いる。評点の持つ動機づけを失わせる衝撃をできる限り少なくする。
35-1. 評価方式を完全に透明にする。そして生徒とその仲間も自分たちの見方を表明できるしくみを組み入れる。
35-2. 評点も単に客観的な成績のレベルにとどまらず、努力と進歩も確実に反映するようにする。
35-3. 筆記テスト以外の測定法も使用した継続評価を用いる。
35-4. 様々な自己評価法を提供することで、正確な生徒自己評価を推し進める。

出典：Dörnyei,（2000）,米山・関〔訳〕,（2005）, p.167-169から抜粋

参考文献

阿川敏恵,阿部恵美佳,石塚美佳,植田麻実,奥田祥子,カレイラ順子,佐野富士子,清水順(2010)「大学生の英語学習における動機減退要因の予備調査」『JALT Language Teacher』 pp.11-16

Brophy, J.E. (1998). *Motivating students to learn.* Boston, MA: McGraw Hill.

Dörnyei, Z.（2000）. Motivation in action: Towards a process-oriented conceptualization of student motivation. *British Journal of Educational Psychology,* 70, 519-538.

Dörnyei, Z.（2001）. *Motivational strategies in the language classroom.* Cambridge: Cambridge University Press.（米山朝二・関昭典訳（2005）『動機付けを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店）

鈴木 渉・Adrian Leis・安藤明伸・板垣信哉（2010）「日本人大学生の英語学習に対する動機づけ調査」 http://rceiu.miyakyo-u.ac.jp/img-nenpou2010/ron3%20saai.pdf（最終閲覧日：2019/10/05）